

思い出を

よみがえらせた人たち

対馬の朝鮮通信使、今と昔

朝鮮通信使行列振興会

江戸をめざす朝鮮通信使が日本で最初に立ち寄った対馬で、1980年から通信使の行列が再現されている。「対馬厳原港まつり」の仮装行列の一部として一店主のアイデアで始まったものだが、地域の歴史を再現する催しとして次第に商工会の人たちが協力。行政も参画するようになった。今

では公務員、自衛隊員、企業人、小学生から高校生までが行列に参加する。韓国からも正使役と副使役の2人、プロの舞踊団、高校の宮中吹打隊を招聘し、総勢300人によるパレードが毎年行われている。2009年、サントリー地域文化賞を受賞。



潮干なば またも 吾れ来む いざ行かむ
 沖つ潮騒 高く立ち来ぬ

●万葉集巻15-3710(遣新羅使の歌、作者不詳)
 【現代語訳】潮が引いたら また帰って来よう さあ(新羅を目指して対馬を)出発しよう
 沖の潮騒が ほらあんなに高まつてきた



稲田充さん。

国境の島

九州と朝鮮半島のあいだに位置する対馬は、南北およそ八二キロ、東西約一八キロの細長い島である。北九州から約一三〇キロ、韓国の釜山から約五〇キロの距離にあり、九州よりむしろ半島に近い。

その地理的位置ゆえに、太古の昔から大陸・半島の勢力と日本の勢力がこぶつかった。あるいはその近辺で、たびたびぶつかった。けれども平和な時代に

は、対馬と半島のあいだを人が頻繁に往き来し、交易が活発に行われた。なかでも江戸時代には、通信使と呼ばれる李朝の訪日使節団が、將軍の代替わりがあるたびに対馬を経由して大阪、京都、江戸へ向かった。

一九八〇年、朝鮮通信使の行列は対馬厳原の港まつりの一部として復活する。関係者の努力でやがて大きな催しとなり、日本の他の地域、そして韓国釜山にまで広がる。二〇一七年には通信使関連の資料が、ユネスコの世界記憶遺産として登録された。二〇〇九年にサントリー文化財団の地域文化賞を受賞した通信使行列の今と昔を知るために、海を渡って対馬を訪れた。

行列復活

祭り前日の午後、博多港からフェリーで対馬の厳原港へ到着。翌朝九時か

ら、朝鮮通信使行列振興会会長の稲田充さんと、二代目の会長である庄野伸十郎さんの話を聞いた。

一八一一年に最後の朝鮮通信使が対馬を訪れてから約一七〇年後、その行列を再現したのは、大阪から対馬へ移住し厳原で大阪屋という衣料品店を経営していた伸十郎さんのお父さん、晃三朗さんである。もともと厳原では港まつりという催しが一九六四年以来、毎年八月最初の週末に行われていた。人口減少に悩む対馬の現状を心配し、なにか港まつりの人寄せになるような企画はないかと思案していた晃三朗さ



庄野伸十郎さん。



色とりどりの衣装のチマ・チョゴリ隊。

んは、韓国の民族服を着た女性が集団で歩けば目立つだろう。そう思いついたらしい。釜山でチマ・チョゴリを買いつけ、自分の会社の女性従業員にさせて仮装行列に参加させた。

一九八〇年の春、厳原で上映された在日韓国人史研究家辛基秀氏制作の『江戸時代の朝鮮通信使』というドキュメンタリー映画を観て、晃三朗さんはインスピレーションを受ける。これは対馬の歴史そのものではないか。仮装行列への参加を發展させて、通信使の行列をぜひ今年の夏から再現しよう。ただちにそう決心した。

晃三朗氏は特定の政治信条をもたず、歴史についてとりわけ詳しくもなかった。朝鮮通信使行列再現の目的は、ただただ港まつりの目玉に使い、対馬の島おこしと厳原の活性化につなげることに。それだけであった。

もし通信使行列再現の試みが、日韓



「対馬厳原港まつり」で行われるボートレース「舟グロー大会」。
対馬の漁村に古くから伝わる和船を使う伝統行事。

友好、反戦平和といった政治的色彩を帯びていたら、長続きしなかっただろう。実際に、チマ・チョゴリの仮装行列、通信使行列には、多くの反発があったそうだ。なぜ日本の祭りで日本人が韓国の民族服を着て行進せねばならないのか。戦後間もなく引かれた李承晩ラインによって韓国の官憲に拿捕された島の漁民も、少なからずいた。

「実はもつとも強く反対したのは、私の私なんだ」と、伸十郎さんは言う。朝鮮通信使の再現よりも、本業に力を集中してほしい、と息子は考えた。しかも行列に参加した女性従業員たちの一部がいやがって、伸十郎さんに泣きついてきた。彼女たちがやりたくないことを無理して続ける必要はないと、息子は父に訴えた。

それでも、通信使行列を本格的に再現するという晃三朗さんの決意は変わらなかった。晃三朗さんが企業や役所

に呼びかけて、朝鮮通信使行列振興会が発足する。厳原町（現対馬市）がやがて補助金を出すようになり、市や県、国の機関の職員、さらに自衛隊の隊員らが行列に参加するようになった。最初は人集めに苦労したが、段々に参加者が増えた。

晃三朗さんは、初代の振興会会長に就任して意欲満々であった。しかし残念ながら一九八五年に急逝する。通信使行列の存続にとって、最大の危機である。厳原町長はじめ、関係者の面々



は、相談の末、伸十郎さんに二代目の会長就任を依頼した。「自分は通信使行列の構想にことごとく反対して、親父と大喧嘩をした。だから一切手伝わなかったし、何も教わっていない、役に立たない」と断った。しかし関係者は他に人がいない、どうしても受けてくれとあきらめない。「それでは二年だけ、つなぎとして」と渋々同意したのに、「結局一五年やらされた」と、庄野さん。そばで現会長の稲田さんが、「私も二年間だけという約束で引き受けたのに、もう六年やっている」と笑う。

しかし二人とも、いざ会長になると、見方が変わった。「会長になった以上、いいかげんなことはできなかつた」と庄野さんは言う。朝鮮通信使について、改めて勉強をした。稲田さんも、会長になってから勉強するようになり、初めておもしろいと思つたそうだ。



行列の花形、ペギンセ舞踊団。8月の炎天下、笑顔絶やさず踊り続ける姿は、さすがプロ。



2001年から参加している釜山・白楊高等学校吹打隊。



地元小学生らによる子ども通信使。



地元高校生らが扮する楽人。

せてもらった。年々発展して今や大きな行事となった通信使の行列には、全部で約三〇〇人が参加する。

正午すぎ、振興会が本拠を置く交流センターに参加者が集合し、めいめい衣装の着付けを始めた。子供、高校生、男性、女性、役所の職員、陸上自衛隊員、商工会の人たちといろいろいるけれども、正使役・副使役の二人、釜山白楊高校の吹打隊（民族楽団）とペギンセ舞踊団を除けばほとんどすべて地元の人である。それがどうであろう。李朝の宮廷服を身につけたとたんに、室内が一気に華やぐ。そして何とよく似合うことだろう。韓国の人たちはわれわれの遠い親戚なのだなあ、と思う。

櫓門を出発した行列は、ゆるやかな坂道を下りはじめた。ラッパ、太鼓、ドラの音が響く。左折して、交流センターの目の前に行く。子ども通信使、対馬藩の武士の一行、馬上の対馬藩主。通信使の一行。太鼓やシンバルを打ち鳴らしながら行進する吹

朝鮮通信使の行列が金石城東の櫓門を出発するのは、午後三時である。関係者は午前中から準備に忙しい。稲田さんと庄野さんの話を聞いたあと、行列準備の様子を見

ごらん パレードが行くよ



道を清める役割で通信使の先頭を行く清道旗の一隊。



暑さで疲れ気味。



フィナーレで対馬守と通信使正使が「誠信交隣」の国書交換。



日韓の高校生が交流する「新・朝鮮通信使」事業懇親会。

打隊、踊り続ける舞踊団の面々、しんがりをつとめるチマ・チョゴリ隊の一団。色とりどりの民族衣装が、明るい日差しのもとで映える。

よみがえる記憶

人口三万人の対馬に通信使行列の時期だけで三万人の観光客が島外から訪

れるというほど、この事業は大成功をおさめたが、ここまで来るにはいろいろ苦労があった。そもそも初期には、日韓両国で関心が薄かった。対馬の人にも韓国の人も、朝鮮通信使の歴史を何も知らなかった。

日韓のあいだでは、ときどき難しい政治問題が起きた。歴史教科書、竹島、靖国神社、慰安婦、仏像窃盗などをめ

ぐって、緊張が高まる。しかし対馬の人たちは政治問題からは距離を置き、関与しないという方針を貫いた。「韓国に媚びる行列をやめろ」と要求する人たちに、庄野さんは「これは韓国の歴史ではなく、対馬自身の歴史を再現しているんだ」と何度も説明した。

さまざまな障壁があったものの、通信使行列を毎年繰り返し行うことによ



鳥帽子岳展望台から見た浅茅湾(あそうわん)。東には対馬海峡、西には朝鮮海峡が広がり、古代から天然の良港として知られる。



行列の後も約1時間の舞台を務めたベギンセ舞踊団。疲れの色を全く見せずに盛り上がる。

り、次第にその輪が広がる。さらに通信使が立ち寄った全国の町や村を、庄野さんと対馬の実業家が訪れ、協力を呼びかけた。この結果一九九五年に朝鮮通信使縁地連絡協議会が対馬で発足、これらの土地でも通信使の行列が再現されるようになった。

日韓が共同でサッカーのワールドカップを開催した二〇〇二年三月には、朝鮮通信使の行列が初めて釜山で、目抜き通りを行進する。それ以来同市の「海のまつり」の一部「朝鮮通信使祭り」として、毎年五月に行われてきた。二〇一〇年には同行事の母体として釜山文化財団が設立され、朝鮮通信使祭りの実施だけでなく、関連した研究や文化交流を推進している。

そして二〇一六年には、釜山文化財団と縁地連絡協議会が共同で、日本各地と韓国に残る朝鮮通信使にかかわる文書、絵図などをユネスコ世界記憶遺

産に登録申請し、翌年承認された。町おこしのために始めた行列再現が、朝鮮通信使に関する記憶を日韓両国でよみがえらせ、世界的意義をもつことが認められた。

行列のあと、港の特設ステージでの最後の公演を終えてかけつけたベギンセ舞踊団の一行を待って、川沿いの料亭で関係者との懇親会がはじまった。最初に庄野さんが、前に立って挨拶する。「みなさん、こんなに立派な行列をしていたら、ありがとう」と言うなり、言葉につまり、涙声になった。それ以上、言葉が出ない。「ありがとう、ありがとう」と言って、席に戻る。

乾杯があつて、一同冷たいビールで杯を重ねる。みな楽しそうだ。私は部屋の隅に腰かける庄野さんに、「お父さんの思いが実りましたねえ」と声をかけた。「阿川さん、親父とは大喧嘩をしてるくに口をきかなかつたけれ

ど、亡くなる少し前に一言おれに言ったんだよ。』あとは頼む』ってね」
港の方角から祭りの最後を飾る、打ち上げ花火の音が聞こえてくる。

島を去る

祭りの翌日、貸し切りタクシーで伝統に満ちたこの島を北上し、比田勝港から釜山へ渡った。一泊して翌日の午後、カーフェリー「パンスター・ドリーム」に乗船して、大阪へ向かう。出港から一時間ほど経ってデッキに出ると、右舷に対馬の長い島影が見えた。

この船は、ほぼ朝鮮通信使の通ったコースを辿っている。通信使だけではない。無数の人が二〇〇〇年以上の長い年月、この海の道を行き来してきた。対馬は、半島と日本とのあいだで生起した幾多のできごとを目撃し、記憶している。庄野親子はじめ、対馬の人たちがよみがえらせた通信使の記憶は、その貴重な一部である。島影はやがて遠ざかり、暮れなずむ海と空のあいだに溶けこんで姿を消した。

(あがわなおゆき・法学者、エッセイスト)